

漢長安城桂宮 4 号 建築遺跡の調査

調査経緯と概要

当研究所と中国社会科学院考古研究所（以下、考古研）との共同研究は1991年にはじまり、1996年からは奈文研の特別研究「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」の一環として5年間の共同研究を行ってきた。その中心が陝西省西安市に所在する漢長安城桂宮の発掘調査である。今回はその発掘調査の最終年度となる。

桂宮は前漢武帝（前157～87）が后妃のために造営した宮殿で、未央宮の北側に位置する。その規模は1962年のボーリング調査で南北1800m×東西880mと判明した。大規模な発掘調査は今回の一連の共同研究が初めてであり、これまでの主な成果は以下の通りである。まず1996年度は発掘を行わなかったが、考古研のボーリング調査によって建物跡が確認された。97・98年度は桂宮 2 号建築遺跡 A 区・B 区の共同発掘をおこない、中枢部とみられる大規模な建物を検出した（『年報1998－Ⅰ』、『年報1999－Ⅰ』）。99年度に行った 3 号建築遺跡の共同発掘では、大型の建物とそれに隣接する倉庫群を検出した

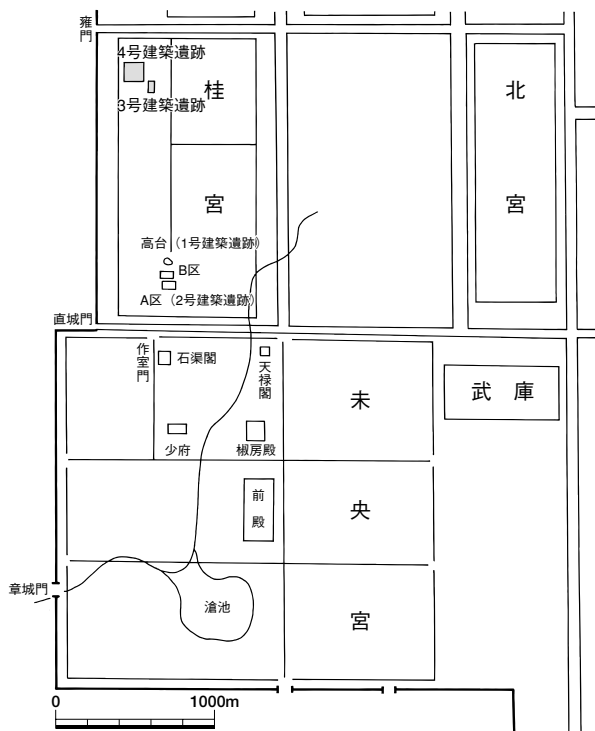


図1 調査区位置図（漢長安城西南部）



図2 建物1・回廊取り付き部の瓦散水（北東より）

（『年報2000－Ⅰ』）。

今年度は調査区を東西124m×南北120m、14880㎡とし、昨年度調査区の北西に設定した（図1）。調査期間は2000年10月から翌年3月までである。日本側から11～12月に蓮沼麻衣子・石橋茂登、3月に小澤毅・吉川聡・清水重敦が参加し、遺構写真を中村一郎が撮影した。このほか田辺征夫、浅川滋男も訪中して協議などを行った。中国側からは劉慶柱所長、李毓芳隊長、張建鋒が参加し、現地での調査はおもに李毓芳隊長が指揮を取った。このほか共同研究の一環として、11月に山崎信二・千田剛道が西安研究室にて瓦の調査を行った。

調査現場ではこれまで同様、日中双方の発掘調査方法の交流をはかった。日本側はトータルステーションによる測量と遺構図の作成、4×5判および6×6判カメラによる遺構写真撮影などを行った。本稿の遺構図・写真はこれによるものである。

調査区の遺構面は浅く、耕作土と包含層を除去すると地表下0.3～0.5mで遺構面となる。周辺は1970年代に大きく削平されたといい、遺存状況はあまりよくない。遺構は調査区中央を南北に通る道路で大きく東区と西区に分けられ、基壇建物3、回廊1、天井2、地下室3、磚敷1などを検出した（図3）。調査区の西北・東南部分は庭院とみられる場で、顕著な遺構はない。

検出した主な遺構

道路 西区と東区を区切る幅8.9mの南北道路。現存長は92m。西区南半は基壇の壁、それ以外は東西両側を牆（土壁）によって限っている。側溝はない。

建物1 東区北半で検出した大型の基壇建物。全体はL字形を呈し、周囲に廊道（犬走り）を巡らせる。廊道の外周は瓦散水とする（図2）。基壇の中に地下室2基、天井（庭院）2カ所を検出した。また基壇上面には複数の礎石（暗礎）がある。建物への入り口は基壇南西部と北面中央部の2カ所。北面入り口の西脇には北へ張り出す形で門衛所とおぼしき部屋が設けてある。

天井1 建物1 東南部の天井。周囲を瓦散水で囲む。中央東寄りに雨水を溜める方形の穴（滲井）を穿つ。

天井2 建物1 北端の天井。周囲を瓦散水がめぐる。こ

の天井の東側、建物1の入り口部分に五角形水道管が埋設されている。天井からの排水に関する施設か。

地下室2 建物1の南端中央にある（図5）。廊道に穿たれた門道からT字形に接続する幅1mの通道を通して主室に入る。主室は南北6.25m、東西3.2m。上部構造は壁柱で支える。壁は軟質の磚を積み上げ、スサ入りの土ときめ細かい土とを塗って仕上げる。通道と主室は二段掘りにされており、中央部の底面が壁柱の礎石より0.5mほど低い。床を張っていたのであろう。また底面には大量の炭が残っており、明らかに火熱を被っている。

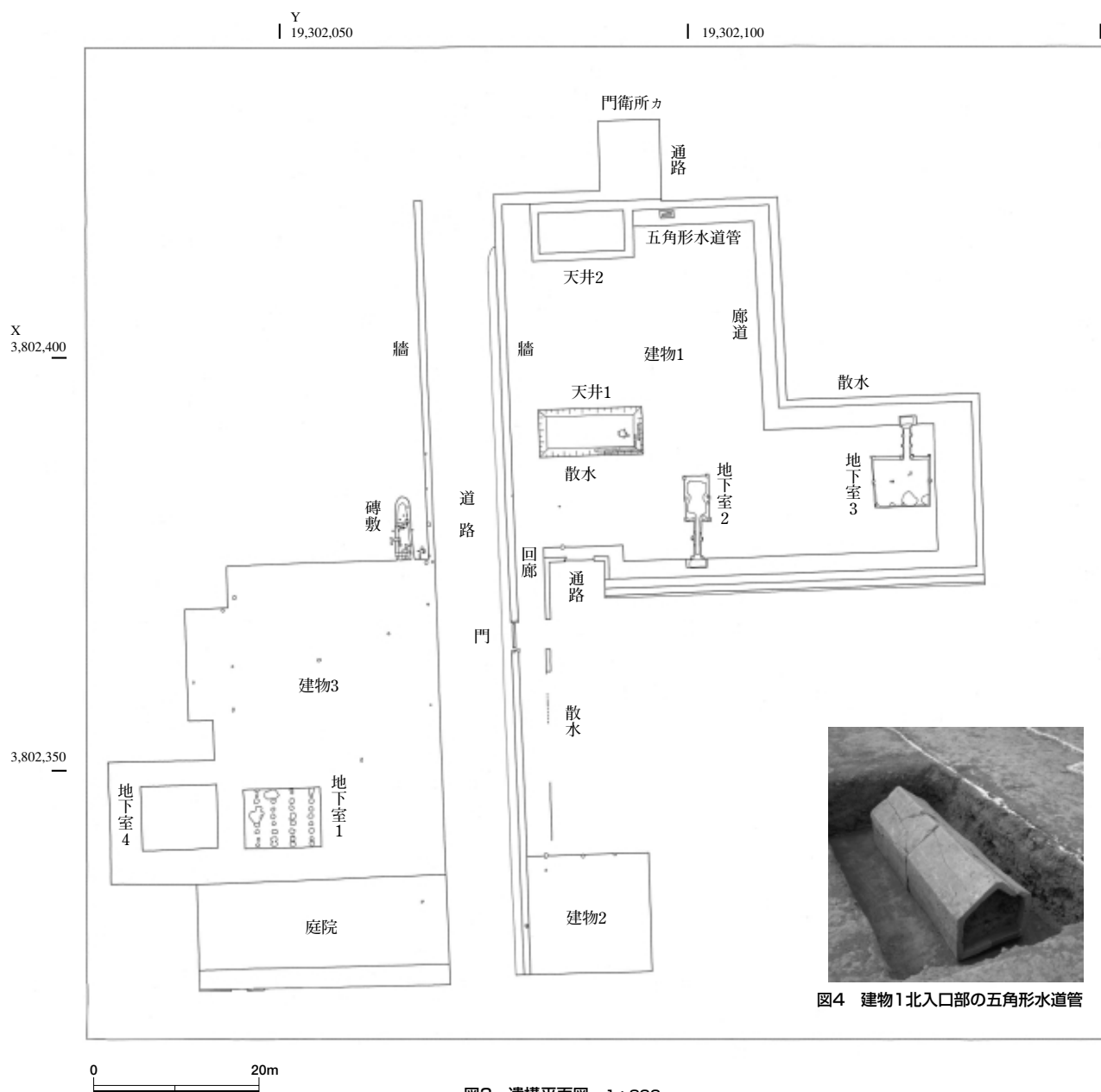


図4 建物1北入口部の五角形水道管

図3 遺構平面図 1:800



図5 地下室2の東壁（北より）

地下室3 地下室2と同様の構造を持つが、こちらは主室が広く、南北約6m、東西約7mある（図6）。上部構造は壁柱のほか、主室内の東西に並べられた礎石2石で支えられている。

門・回廊 建物1の西南に、中央の南北道路と平行してはしる散水がある（図2）。これは西側を牆、東側を柱列とした回廊にとまなうものと考えられるが、柱列の痕跡はない。建物1に近い位置で散水と牆がとぎれる所が、牆に開いた門と通路部分である。門は間口3.2mで、地覆痕跡が明瞭に残り、その両端に2個ずつ自然石の礎石を据えている。

建物2 東区の南北方向にのびる回廊の南端と接続する建物。礎石（暗礎）を複数検出した。

建物3 西区の南半でも大型の基壇を検出した。基壇上には17個の礎石が点在する。後述するようにこの基壇は相当削平されているので、これらの礎石も暗礎である。基壇の西南部には地下室3がある。地下室3の南側で五角形水道管の底部を検出したが、このレベルは明らかに建物1の五角形水道管より高い。

地下室1 地下室2・3とは異なる構造をもつ。平面は方形を呈し、東西4列の礎石が並ぶ総柱構造である。1列あたり9個の礎石があり、0.5m大の扁平な自然石を用いる。根石には割石を据える。壁面は土壁のままである。この地下室は未央宮少府建築遺跡の例から、上部に張った床のための通風施設と考えられる。しかし通気道は遺存せず、地下室の深さも0.5mと浅いため、建物3の基壇が相当削平されていることがわかる。

磚 敷 建物3の基壇北側に牆と平行して敷かれたもので、幅2m分だけ残存している。中央部が舟底状に窪ん



図6 地下室3（北より）

でいる。

出土遺物

調査区からは多数の瓦・磚・土器・銅鏃などが出土した。なかでも注目すべき遺物として、東区の牆にかけられた門の北側で出土した刻石の断片がある（図版2下段）。「封壇泰山」の文字が読みとれ、泰山における封禪の儀式に関する遺物とみられる。

まとめ

本年度の調査により、桂宮北方地区において非常に大型の基壇建物が道路を挟んで並び建つ状況が判明した。2棟は地下室の様相がまったく異なり、建物の機能差を想定させる。3号建築遺跡の倉庫群とあわせ、桂宮北半部が、中枢部の構造とは異なる様相で明らかとなり、貴重な成果を得た。だがこれらの施設群の性格については不明瞭なまま残された。将来の調査を待ちたい。4号建築遺跡の最終的な調査報告は、『考古』2002年第1期に掲載される予定である。さらに日中共同の正報告書も製作が進行中である。

桂宮での一連の調査においては、日中各研究所がそれぞれのフィールドで培ってきた発掘技術を交流することに意を注いできた。なかでも一連の調査において、中国ではまだほとんど導入されていないトータルステーションでの測量を一部に取り入れたことにより、広大な遺跡での迅速かつ正確な測量が可能となったことは特筆される。操作法を習得した漢城隊員による独自の測量も行われ、技術交流の大きな成果をあげることとなった。

今回で桂宮の共同発掘は終了となる。来年度からは大明宮太液池での共同発掘が予定されており、日中共同研究のさらなる展開と成果が期待される。（石橋茂登・清水重敦）